

古墳に埋葬された被葬者に関する 複合的研究の提示

—人骨資料として出土する被葬者の考察を中心として—

谷 畑 美 帆

要旨 古墳の被葬者については、これまで埋葬遺構や副葬品などを中心に考察されてきた。これは追葬などによって被葬者の原位置が移動していることや被葬者である人骨の遺存状態が不良であることによる。しかし、破片状態の資料であっても被葬者に関する情報を得ることはある程度可能である。

本稿では、古墳の中でも複数の被葬者が埋葬されている破片状態で出土している人骨資料の出土地点を踏まえたうえで被葬者数と頭位を認識している。観察対象資料としたのは法皇塚古墳・金鈴塚古墳・菅田古墳から出土した人骨資料337点である。中でも、分析対象とした法皇塚古墳および金鈴塚古墳出土例では馬具のセット数と被葬者数が一致しており、それぞれの被葬者が1セットずつの馬具を保持していたと考えられる。

また金鈴塚古墳において被葬者が奥壁→石棺内→石棺外(→羨道)の順に葬られたとすれば、初葬者および2人目が20歳代、3人目が40-50歳代と想定され、このことは最も豪華な馬具のセットを保有し、東京湾入り口の要衝に大前方後円墳を築造した人物が、若年の人物であった可能性を示唆している。またその後、築造に規制を受けた結果、既存の前方後円墳に追葬されたとの仮説を裏付けるものともなる。

菅田古墳群においては、時期差が明瞭な副葬品が少ないため、埋葬順などの考察は現段階では進んでいないが、被葬者の人数推定と帰属する副葬品についてのある程度の記述は行うことができおり、未成人の個体が石室のいずれかの地点に埋葬されていたことも明らかとなっている。

本稿で試みたような研究は、基本的に、発掘現場において詳細な取上げ作業が実施された場合においてのみ可能となる。これまで古墳の出土人骨については、遺存状態が不良なことが多いため、人類学的には注目されることが少なかった。しかし、今回のように、たとえ遺存状態のよくない資料であっても、出土地点を記録し、地道な同定作業を行うことで、被葬者と副葬品に関するコラボレーション的な研究が可能であり、今後は被葬者に関する情報もあらたに提示することが可能となる。

キーワード：古墳時代、人骨、被葬者

はじめに

先史時代から古代の埋葬遺構は、葬られた人物が生前、その属した社会や組織に対してどのような貢献（役割）を果たしたのかを示す重要な手がかりとなる。特に、3～7世紀にかけて営まれた古墳時代の埋葬遺構の場合、その手がかりとなる副葬品は多い。しかし、それらと同じくらい重要なのは、古墳に納められた被葬者そのものに関する考察と検討である。とはいうものの、古墳時代の出土人骨の遺存状態は総じて不良であり、中でも一つの遺構に複数の被葬者が埋葬されている場合、被葬者数、被葬者と副葬品との関係について考察することは困難な状況にある。こうした状況を踏まえつつ、本稿では、破片状態で出土している人骨資料をもとに、そこからいかにして被葬者像を復元していくかという方法論について、試案を提示することとする。

1. 研究史

具体的な分析に入る前に、古人骨などから推定される古墳時代の被葬者像をめぐる研究についておさらいをしておこう。

埋葬遺構である古墳や横穴は、基本的に被葬者が亡くなってから用意され、使用される施設である。このため、私たちは埋葬遺構に、その人物の生前の何が反映されているのかを考えながら、分析を進めていく必要がある。

例えば韓半島における新羅王墓の場合、もともと王位継承権を持っていた人物とそうでない人物とでは、最終的に同じように王になっていても、古墳の構造が異なる（朴 2015）。一方、日本列島では、副葬品との組み合わせや古墳の規模等から、その被葬者の性格を考察する研究が少なからず実施されているが、埋葬遺構のありようと、実際にその被葬者がどのような人物だったのか（年齢・性別など含む）ということを認識することは難しい。

しかし、たとえ遺存状況が十分でない場合でも、埋葬されている被葬者そのものである人骨は確実に出土しており、様々な考察が可能である。

さらに、一部の遺存状態が良好な資料に限定はされるが、人骨資料から骨病変に関する研究を実施することもできる。

例えば結核菌は、免疫のない集団に持ち込まれた場合、短期間で拡散し、その勢いを止めることは難しい。先学の研究によれば、感染症の一つである、この結核の所見を持つ個体が古墳時代になると拡散し、増加していることが、骨病変として残された資料から明らかにされている（小片 1981, 鈴木 1998）。

さらに、遺存状態の良好な資料を研究することで、古墳時代人の形態的特徴についての概要をある程度つかむこともできており（田中 2014）、歯冠計測値等からも複数個体埋葬における

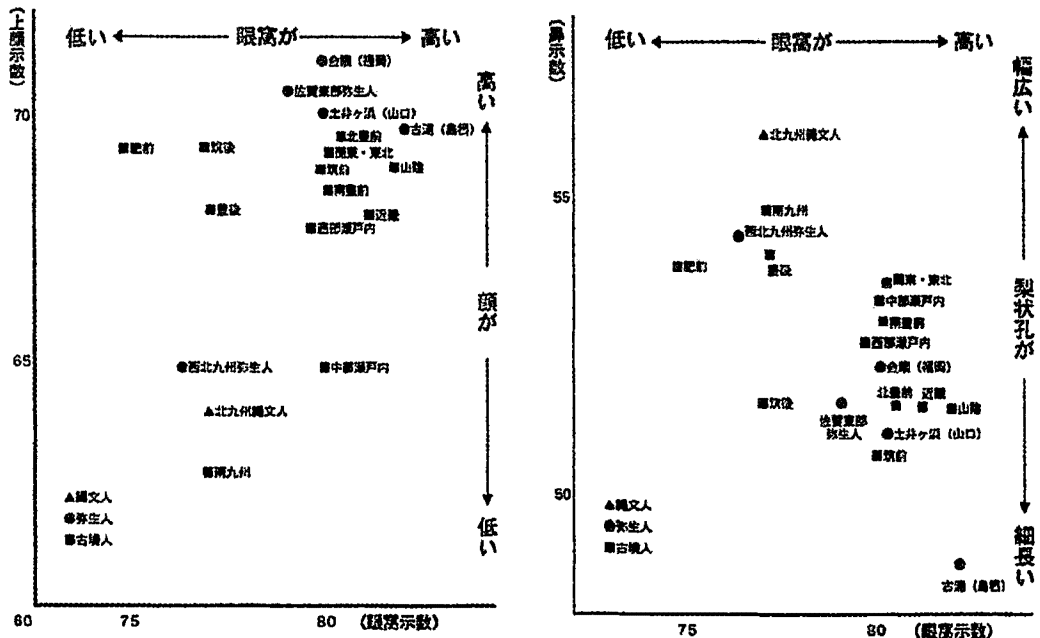
血縁関係の有無などについても推定されてきた。

また古墳時代人骨の中でも、南九州の一部に存在する地下式横穴墓（5世紀から7世紀前半）から出土する人骨の遺存状態は、例外的に良好である。地下式横穴墓は、竪坑の先に設けた玄室を石や粘土で閉塞したものだが、こうした場合人骨が土で覆われず、かつ墓が密閉状態を保っていることが多く、被葬者である人骨や副葬品の遺存状態はすこぶる良好である。

ちなみに、こうした地下式横穴墓群から出土する古墳時代人骨の形質には差異があり、西北九州人に近い「南九州山間部タイプ」、北部九州弥生人に近い「宮崎平野部Ⅰタイプ」、周辺と類する特性を見出せない「宮崎平野部Ⅱタイプ」の3つのタイプが存在するとされる（松下1990）。

これらのうち、宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群から出土している人骨集団は、「宮崎平野部Ⅰ」に近く、渡来系の遺伝子のある程度受け入れた集団とみなされている（竹中2015）。また、島内69号墓に埋葬されている壮年女性（2号人骨）の骨盤内外にかけて墓石が遺存しており、アブラナ科・アカザ科—ヒエ科、ヨモギ科などの植物類の摂取が確認されており、被葬者の死亡時期が春であった可能性が高いと考えられている（金原・金原1999）。

島内の出土人骨は、このように遺存状態が良好なため、骨病変の有無についても調査が可能で、骨折などの外傷性疾患が確認されている。その結果、この集団では受傷人骨（戦闘などで傷を受けた人骨）の比率が極めて高く、これらは戦闘行為の結果と考えられている。また、周



第1図 日本列島内における先史・原始時代人骨の顔面形態に関する地域性（田中 2014）

辺の地下式横穴墓に比して、島内集団には甲冑をはじめとする武器・武具類の副葬数が多いことなどもその傍証とされている（橋本 2012）。

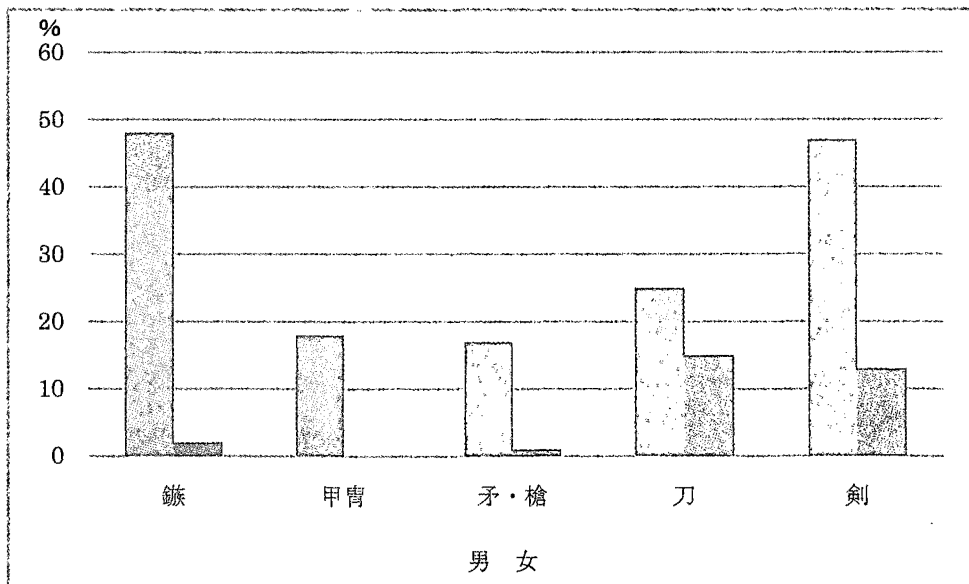
繰り返しになるが、このように古墳の埋葬施設には、被葬者以外に様々な資料が副葬品として納められている。こうした副葬品として納められたモノは当時の「儀礼や供献を示すモノ」と、被葬者に「帰属するモノ」とに大きく分けることができると考えられる。

また古墳時代の研究者たちは、こうした副葬品を手掛かりに、その組み合わせから被葬者について考察する研究を実施してきた。例えば、儀礼や供献を示すモノでは、葬送儀礼の一環で用いられた須恵器などから考察が進められている。

6 世紀中ごろ（古墳時代後期）に相当する愛媛県松山市葉佐池古墳の 1 号石室からは、須恵器の有蓋短頸壺の中に、ヨモツヘガイのための食材がのせられた状態で出土している。さらに複数が埋葬された人骨の頭部から胸部にかけて、ハエの蛹の抜け殻が検出されており、これは当時、数日に及ぶモガリの儀式が行われたことを裏付ける資料となっている。

被葬者に「帰属するモノ」から被葬者の特性について考察する研究も実施されている。例えば 4 世紀（古墳時代前期中葉から後葉）においては、被葬者に帰属するモノから武人的な性格を持つ首長と司祭的な性格を持つ首長の権力的な支配が実施されていたと考えられており（下垣 2011）、5 世紀（古墳時代中期後半）には副次的な被葬者が軍事的な性格を持つようになると考えられている（鈴木 2002）。

その理由としては、中心となる埋葬施設に武具である甲冑が埋葬されていることが多い一方



第 2 図 武器の種類と性別（清家 2010 より作図）

で、中には甲冑を副葬しない事例も確認されているからとされている（内山 2015）。

さらに、6 世紀（古墳時代後期）になると、群馬県綿貫観音山古墳や埼玉県將軍山古墳に見られるように、1 つの埋葬遺構に複数の甲冑を納める事例を確認されるようになるが、これについては、武具埋葬の規制緩和が想定されている（内山 2015）。

また、古墳から出土する人骨資料の遺存状態は総じて不良ではあるものの、中には性別を推定できる個体もあり、被葬者の性別と絡めた研究も実施されている。

例えば、4 世紀（古墳時代前期）における刀剣類の保持には基本的に男女差はないが、保有に関しては階層差に基づく多寡が確認され、刀剣を副葬する場合でもそのタイプが異なることが指摘されている（清家 2010）。また、棺内と棺外に刀剣類を副葬するタイプが軍事指導者的性格を強くもつとの指摘もある（鈴木 2010）。

また、棺内から出土する武器が、男性被葬者の場合、短刀・短剣を中心に様々なタイプの刀剣が副葬されているのに対し、女性被葬者では、短いタイプの刀剣類のみが副葬される（清家 2010）。

その後、5 世紀（古墳時代中期）になると、性別を問わず、ほとんどすべての刀剣類が棺内に副葬されるようになり（藤田 1989）、刀剣の配置と副葬位置における性差が少なくなる。その一方で、男性被葬者には複数の刀剣が副葬されるのに対して、女性被葬者では 1 本に限定されるなど刀剣類の副葬数に性差が存在することが明らかとなっている（清家 2010）。こうした武器の副葬にみられる性差は、6 世紀（古墳時代後期）にはより顕著なものになるとの指摘もなされている。

しかしながら、被葬者が複数いた場合には、こうした様相を把握するのは困難を極める。これは先述したように人骨の遺存状態の不良さにもよるが、複数個体が埋葬されている場合、初葬の個体を動かして原位置とは異なる場所に移動させることが多いため、遺物や古人骨の配置に齟齬が生じ、各骨格の部位同定がさらに難しくなってしまうことにもよる。

また 6 世紀（古墳時代後期）に相当する小規模な古墳には、3 人から 5 人程度の被葬者が葬られることが多いが、個々の副葬品との関係はおろか、主として人骨の遺存状態が悪いため、総合的な被葬者数の検討や被葬者に関する性別や年齢などの基本的な情報が提示されないことが多くなっている。そのため副葬品と被葬者である人骨をリンクさせた研究が十分に実施されているとは言い難い。

これは繰り返しになるが、人骨の遺存状態に主因があるものの、人骨の細片の出土地点がきちんと記録されておらず、それに関する分析も十分に実施されていないことによる。このため、たとえ正規の発掘調査が行われたとされる場合でも、こと人骨に関しては、資料に関する情報が十分開示されているとはいえない状況にある。

このような状況を踏まえ、本稿では、被葬者である人骨の遺存状態が不良な破片状態におい

て、いかにすれば、そこから可能な限りの情報を引き出すことができるかを実践する。

2. 分析対象と方法

分析対象とする資料について

本稿では、人骨資料の部位同定及び、資料の出土地点の確認、さらにはそれらの人骨とそれに伴う副葬品との関係を考察するため、古墳時代後期に相当する法皇塚古墳（千葉県）、金鈴塚古墳（千葉県）、菅田古墳群（栃木県）から出土した資料を分析対象とした。出土人骨はいずれも破片及び細片であり、それらに関する考察はこれまでほとんど行われたことがない。以下、個々の遺跡とその人骨資料について概要を記述する。

1) 法皇塚古墳

千葉県市川市に位置する前方後円墳（全長 50 m）であり、埋葬施設として残存長 7.55 m とされる無袖式横穴石室が確認されている。副葬品としては武器（大刀、刀子、鉄鏃など）・武具（衝角付冑、挂甲など）馬具（轡、鞍金具、雲珠など）・装身具（中空丸玉を含む玉類、銅釧など）・須恵器があり、破片状態の人骨約 30 点が 2 地点から出土している。

2) 金鈴塚古墳

千葉県木更津市に位置する前方後円墳（全長 95 m）であり、埋葬施設として無袖式横穴式石室（全長 10 m）が後円部に築造されている。副葬品は、武器（太刀・刀・鉄鏃など）・武具（衝角付冑、挂甲など）・馬具（馬鐸・杏葉・雲珠・鞍金具・鐙など）・装身具（金環・切子玉や小玉を含む玉類）・須恵器数百個以上などがある。これらの副葬品は数回にわたる追葬によって、石棺の内外に散らばった状態で出土しているが、遺体の一部として、歯牙・歯牙片 28 点が、石棺内・石棺外・石室奥（奥壁付近）の 3 地点から出土している。

3) 菅田古墳群

栃木県足利市に位置する群集墳であり、計 7 基の円墳（直径 15 m 前後）には、いずれも埋葬施設として横穴式石室が造営されている。副葬品としては武器（鉄鏃など）・装身具（耳環・玉類など）・須恵器のほか、墳丘から埴輪が出土している。いずれの古墳においても数回にわたる追葬が確認され、副葬品と人骨は石室内に散乱した状態で見つかった。このうち、本稿では、人骨が出土している 26 号墳・27 号墳・30 号墳・31 号墳をとり上げる。

- ① 26 号墳（径 14 m の円墳）には全長約 4 m の無袖式横穴式石室が築造されている。須恵器は羨道部および玄室内から出土している。このほか玄室から武器（直刀・鉄鏃・刀装具）・装身具（耳環）、および破片状態の資料を含む人骨 55 点が出土している。

- ② 27号墳（径15mの円墳）には全長約5mの無袖式横穴式石室が築造されている。墓道からは須恵器が出土しており、玄室からは武器（直刀・鉄鏃・刀装具）・装身具（耳環）および破片状態の資料を含む人骨が14点出土している。
- ③ 30号墳（径14mの円墳）には全長約5mの無袖式横穴式が築造されている。須恵器は開口部のテラスから出土しており、玄室からは武器（刀子・鉄鏃）・装身具（釧・耳環・玉類）、および破片状態の資料を含む人骨が142点出土している。
- ④ 31号墳（径10mの円墳）には全長5.6mの無袖式横穴式石室が築造されている。墓道を中心に須恵器が出土し、玄室からは武器（直刀・鉄鏃・刀装具など）・装身具（玉類・耳環など）、および破片状態の資料を含む人骨78点が出土している。

これまで繰り返し述べてきたことだが、破片状態の人骨から被葬者に関する情報を抽出することは極めて困難である。しかし、その一方で、破片状態であっても、ある程度の部位同定が

可能な資料は少なからず存在し、こうした資料が遺構のどの地点から出土したかを確認することによって被葬者の埋葬形態や人数、副葬品との関係性を見出すことも可能となってくる。

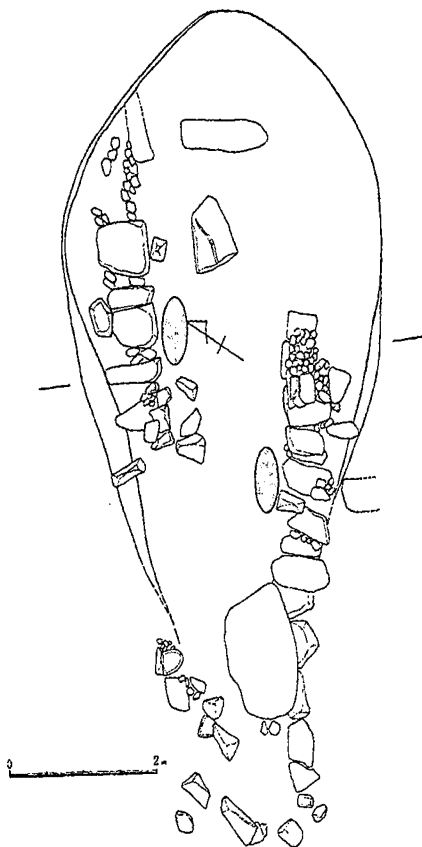
本稿では、前述の3遺跡から出土した人骨資料の部位同定を可能な限り実施し、出土地点が判明している部位から被葬者数の推定を実施し、被葬者と副葬品とのセット関係をみていくこととした。

3. 結果と考察

1) 法皇塚古墳

石室内からは、数十点の人骨が出土しているが、部位同定できる資料は少なかった。部位同定が可能であった資料は、頭蓋骨片の他、大腿骨及び脛骨と推される下肢骨片、中手骨片・前腕骨片となっている。この他、歯牙が数点出土しているのみである。

しかし筆者が1969年の発掘調査時の記録を調べたところ、報告書には記載がなかったが、大腿骨と頭蓋骨が約150cm離れた状態で出土していることが明らかになった⁽¹⁾。



第3図 法皇塚古墳の内部主体（2地点より人骨が出土 1976 小林他より作図）

さらに副葬品として納められている馬具も２セットあることから、本古墳における被葬者は成人２体である可能性が高い。さらに、未萌出とされる歯牙が２点確認されたため、未成人の個体も１体埋葬されていたと考えられる。

以上の所見から、今回初めて法皇塚古墳には成人2体と未成人1体が埋葬されていたと考察できるようになった。

ただし、それぞれの個体においても頭位などは不明である。ちなみに、出土している歯牙は、左下顎第三大臼歯及び左上顎第一切歯片であり、咬耗は前者では Broca の I、後者では Broca の II である⁽²⁾。

2) 金鈴塚古墳

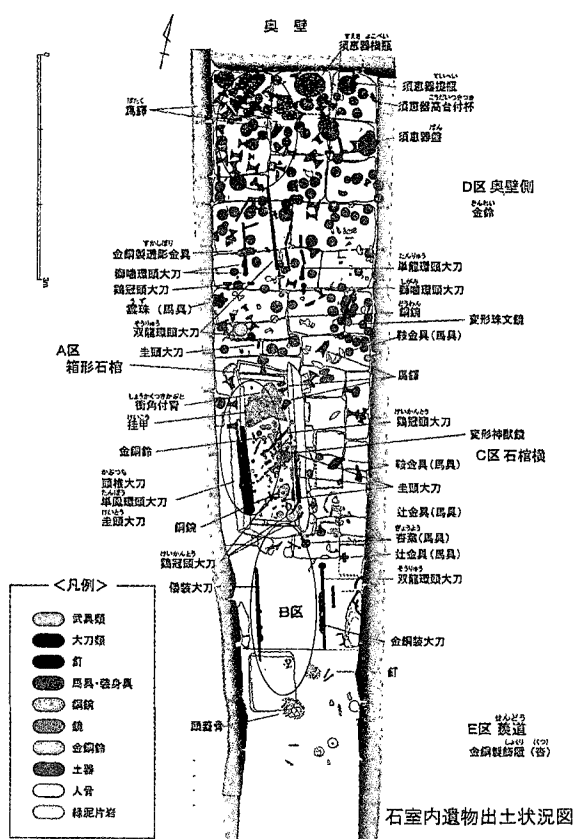
石室内に設置された石棺内・石棺外・奥壁付近の3地点から歯牙が出土したとされる。いずれも歯槽は遺存しておらず、歯牙のみの出土である。このうち、石棺外から出土している歯牙以外には、歯根が遺存していない。

また、これらの中には、副葬品として納められた青銅製品の影響を受け、全体が青黒い色調（Munsell notation 7.5GY 2/1）を呈しているものがある。以下、石棺内・石棺外・奥壁付近の3地点から出土している合計27点の歯牙について記述する。

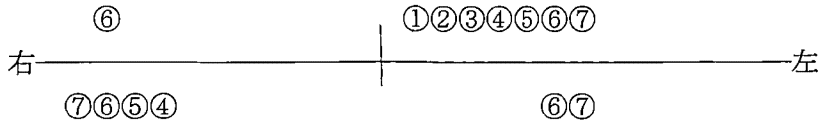
石棺内：上下顎の歯槽は遺存していないが、歯冠部のみが遺存した歯牙が出土している。

歯冠には上顎歯牙の変色が著しく、青黒い色調を呈しているものもある。肉眼観察では咬耗は確認できていないが拡大鏡による観察では大白歯において一部咬耗が確認できる。

咬耗の程度は石棺内から出土している個体については、エナメル質のみにとどまる (Broca I)。



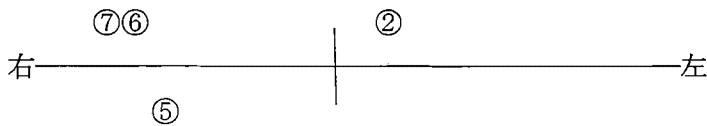
第4図 金鈴塚古墳の内部主体（稲葉 2012 より作図，3
地点より歯牙が出土）



石棺外：上下顎の歯槽は遺存していないが、歯冠部のみが遺存した歯牙が出土している。

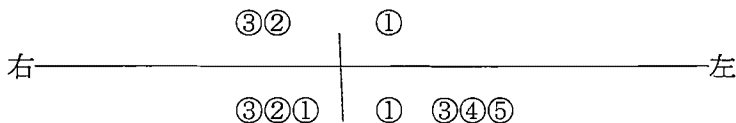
歯牙の咬耗は、遺存している切歯及び小臼歯においては象牙質にまで達している。大臼歯ではエナメル質にとどまるが、咬耗が進んでおり、咬頭は確認できない。上顎右第一大臼歯の近心歯頸部には虫歯の所見が確認できる。

石室奥：上下顎の歯槽は遺存していないが、歯冠部のみが遺存した歯牙が出土している。歯牙咬耗は拡大鏡観察においてもわずかに確認できるのみである。



石棺外出土の上顎右第1大臼歯、及び下顎左第一小臼歯の歯頸部に虫歯の所見が確認できる。また上顎では虫歯の大きさは、約0.8mmと比較的大きめであるため、この歯牙に接する歯牙が遺存していた場合、本歯牙同様、虫歯の所見が確認される可能性がある。咬耗は、石棺外から出土している一部の歯牙（小臼歯・切歯）において咬耗が達している以外はBrocaのⅠにとどまる。

石室奥壁付近：上下顎の歯槽は遺存していないが、歯冠部のみが遺存した歯牙が出土している。



咬耗の程度は石室奥から出土している個体については、エナメル質のみにとどまる。

以上の所見から金鈴塚古墳には成人3体が埋葬されていたと推定される。しかし、木更津市教育委員会の稲葉昭智氏によれば、羨道から耳環を装着した頭蓋骨が出土しており、それらは発掘調査の終了後、横穴式石室に再埋葬された可能性が高いという。その個体を含めれば、金鈴塚古墳には4人の被葬者がいたことになる。また、出土馬具の検討によれば、副葬品として納められている馬具も4セットが確認されている（宮代2014）ため、この状況とうまく一致する。

本遺跡から出土している歯牙の咬耗は、石棺外の個体において著しく、遺存している大臼歯全体に確認されるが、石棺内の個体においては、大臼歯の咬頭を中心に一部が咬耗しているにすぎない。また、こうした歯牙の咬耗程度から、石室奥⇒石棺内⇒石棺外と年齢が高くなると

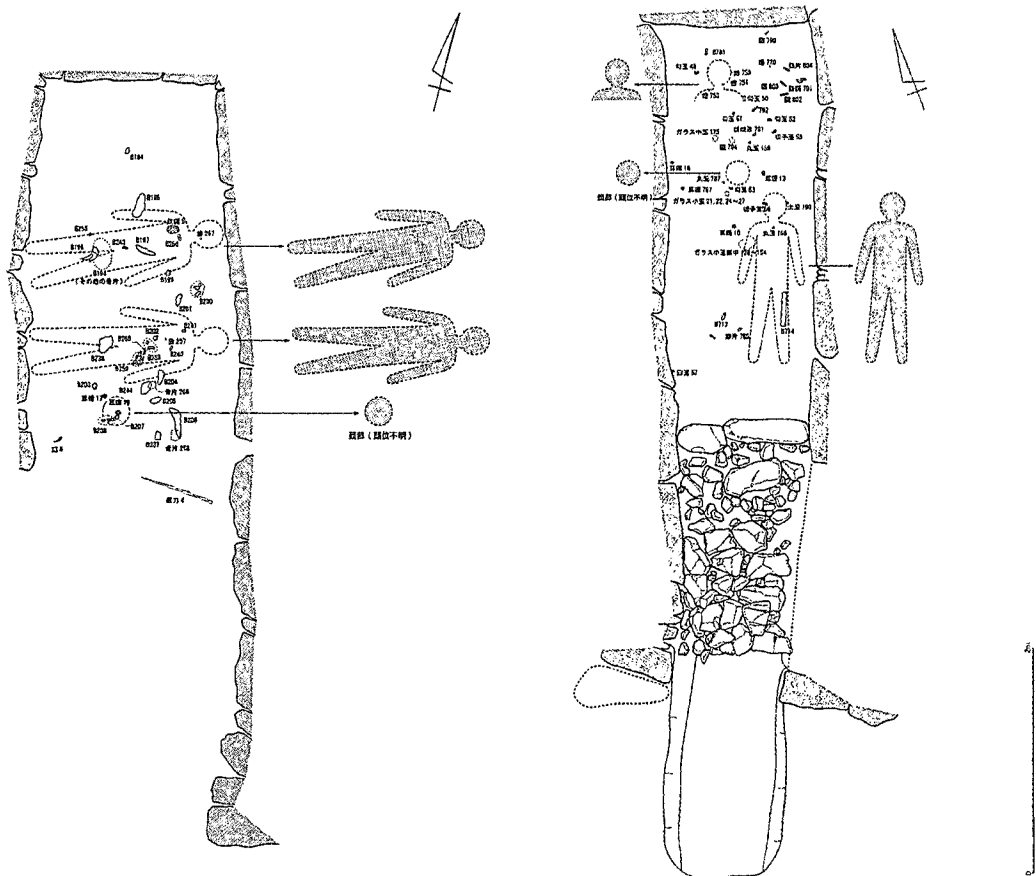
も推定される。ただしそれぞれの個体の頭位は不明である。

ちなみに、歯牙の咬耗から推定される被葬者の年齢は石棺外の資料は熟年、奥壁付近が成年、石棺内が成年となる、また咬耗の程度は石棺内出土資料のほうが奥壁付近の個体に比してやや進行している。そのため、かりに奥壁→石棺内→石棺外の順番で彼らが埋葬されたとするなら、古墳築造に伴う初葬者および2番目の被葬者が20歳代、3番目の被葬者が40-50歳代ということになる。

3) 菅田古墳群

人骨が出土している円墳4基から出土している様相を以下、記述する。

今回観察を実施した埋葬遺構から出土している人骨はすべて破片状態であり、粉化しているものも数十点ほど存在しているが、これらは取り扱わず、大きさ5センチ程度の部位同定が可能な資料のみを観察対象とした。



第5図 菅田古墳における内部主体（左：第26号墓、右：第27号墓の内部主体）

菅田古墳における個々の石室内からは8~20点程度の部位同定が可能な人骨片が出土している。このうち、部位同定後、出土地点を確認することにより、被葬者数を推定している。以下、古墳ごとに記すこととする。

26号墳の玄室では、大腿骨などの下肢骨片及び頭蓋骨片が2地点から出土しており、頭蓋骨片が出土している地点と下肢骨片が出土している地点とでは約70cmの距離がある。さらに歯牙片が3つの地点から出土している。

そのため、本墳には頭位が石室を横断するものの計2体の成人が埋葬されていたとみなされ、玄室奥に最も近い地点から出土した刀装具などは玄室奥に埋葬された個体に対する副葬品とみなされる。また頭位は不明ではあるが、羨道部に最も近い個体に伴う副葬品は、直刀・鉄鏃・耳環とみなされる。

27号墳の玄室では、奥壁付近から歯牙が数点散らばった状態で出土しているが、それらの一部は、大腿骨などの下肢骨片と頭蓋骨片・歯牙片となっている。また、石室の奥壁付近において頭蓋骨片より約10cm離れた地点から胸部の骨片が数点取上げられている。

このため、頭位を北にとる個体が1体存在していたことは明らかで、胸部にあたる付近から、本個体の副葬品とみなされる勾玉や切子玉などの玉類が数点出土している。

また、石室中央部より頭位が不明な個体が1体出土しており、この遺体に伴うとされる耳環が1対（左右にそれぞれ配する状態）出土している。

さらに、羨道に最も近い位置から頭蓋骨片と下肢骨片として採取された破片が2地点から約70cm離れて出土している。このことから、頭位を北にとる個体も埋葬されていたとみなされる。本個体では耳環や丸玉などの装身具が副葬品として配されており、これらのことから、本墳の被葬者は最低3体（成人）であることがわかる。

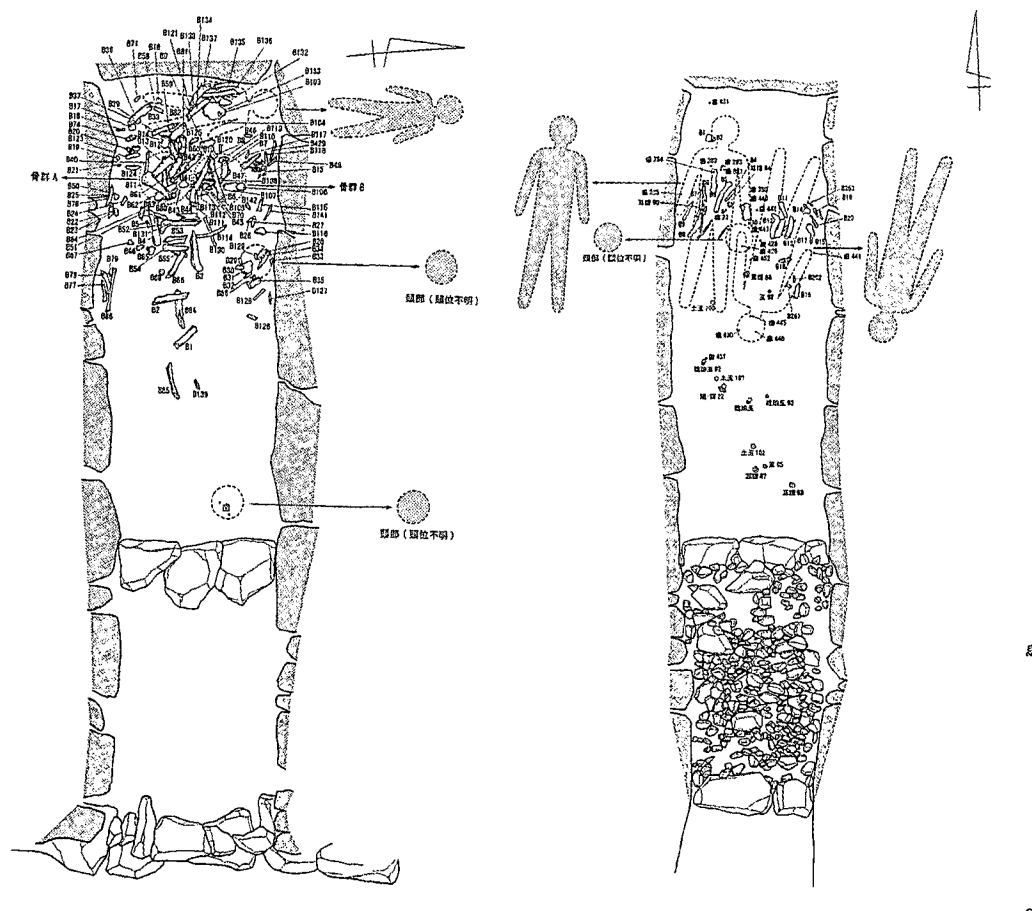
30号墳の玄室からは、約150点の人骨資料が出土しているが、これらの一部は大腿骨などの下肢骨片、頭蓋骨片や歯牙片となっている。このうち、頭蓋骨片と下肢骨片の出土地点によって頭位が確認できたのは1体である。奥壁に最も近い位置に石室に直行する向きで配されているが、本個体の副葬品は不明である。

この他、頭蓋骨片がまとまって2つの地点から出土しており、本墳における被葬者は最低でも成人3体であると推定された。

このほか、石室中央部において集骨された2つの骨群が検出されているが、これらはいずれも大腿骨等の下肢骨によるものであり、追葬時の片付けによるものと考えられる。

また本古墳からは、出土地点は不明であるが、乳歯片も出土しており、未成人の個体も埋葬されていたことがわかる。

31号墳の玄室内からは、約70点の人骨資料が破片状態で出土している。このうちの一部は大腿骨などの下肢骨片・頭蓋骨片・歯牙片となっている。



第6図 菅田古墳における内部主体（左：第30号墓，右：第31号墓の内部主体）

部位同定が可能であった頭蓋骨片や歯牙片と下肢骨片との出土地点が約70cm離れており、頭位を北と南にとる2体の他、頭位が不明な個体1体が埋葬されていたと考えられる。このため推定される頭部の位置と耳環の出土地点がややずれており、玉類などの副葬品は石室全体に散らばっているが、合計3体の成人被葬者が埋葬されていたと推される。

以上、26号墳・27号墳・31号墳ではそれぞれ3体の成人被葬者が埋葬されており、30号墳では成人3体および未成年1体が埋葬されていたと推定される。

まとめと展望

以上、法皇塚古墳、金鈴塚古墳、菅田古墳群から出土した破片状の人骨を対象に、そこに含まれる人類学的な情報を提示し、被葬者の埋葬状況や被葬者像に関する考察を行った。

何度となく書いたが、古墳時代の埋葬遺構から出土する人骨では、ごく一部の例外を除いて遺存状態が不良なため、形態的特徴を把握できる資料は限定されている。

そのため、性別や年齢などといった被葬者に関する基本的情報を抽出することが難しく、結果として被葬者である人物像を考察することが不可能なため、縄文時代や弥生時代の人骨のように形態的特徴に関する地域差や時期差についての議論が進められずにいる。

実際、古墳の被葬者について、人骨資料から考察した研究は数えるほどしかない。また現段階では、古墳の出土人骨の多くは、人類学的な研究の対象資料にもなっていない場合が多い。

研究史で示したように、副葬品とその被葬者をあわせた研究は、複数個体が埋葬された遺構の場合、難しい面が多い。これは数回にわたって実施された追葬により、被葬者である人骨の埋葬位置が意図的に移動されているためである。しかし、筆者のこれまでの経験によれば、古墳の埋葬人骨は破片状態という特徴がつかみづらい状況ではあっても、歯牙などの一部の部位はほとんど移動させられておらず（細片過ぎるために持ち運びの対象にならなかったと推測される）、原位置を保ったままの状態出土することが多い。

このため、被葬者の一部である人骨片を、発掘調査時に、1点ずつ出土地点を記録してとりあげ、その後、それらを観察することで、被葬者やその埋葬状況について、考察を進めていくことは可能である。

本稿で分析対象とした法皇塚古墳では、時期差のほとんどない馬具が2セット副葬されているが、成人の被葬者は少なくとも2体と推定されることから、それぞれの被葬者が1セットずつの馬具を保持していたと考えられる。

金鈴塚古墳では、取上げが完了していない成人1体を含め、今回観察した3体とあわせて、4人の被葬者が推定されるが、馬具の組合せが4セット分確認されており、やはりそれぞれの被葬者が1セットずつの馬具を持っていたことと推定される。

興味深いのは、奥壁→石棺内→石棺外（→羨道）の順で、被葬者が葬られたとすれば、初葬者および2人目が20歳代、3人目が40-50歳代で想定されることで、このことは最も豪華な馬具のセットを保有し、東京湾入りの要衝に大前方後円墳を築造した人物が、これまで私たちが想定していた以上に若年の人物であった可能性を示唆している。

また、もし、2人目、3人目の被葬者の年齢が推定通りであるとすれば、彼らと初葬者の関係はその子どもというよりは、兄弟か叔父・叔母にあたると考えた方がよいのではないだろうか。内山敏行氏は千葉県古墳時代後期の前方後円墳の被葬者について、2人目、3人目は本来なら新たに別の前方後円墳を築いたはずの親族が、築造に規制を受けた結果、既存の前方後円墳に追葬されたとの仮説を提示しているが、今回推定された金鈴塚古墳の被葬者像はこれと合致する。

また、菅田古墳群においては、時期差が明瞭な副葬品が少ないため、埋葬順などの考察は現段階では進んでいないが、被葬者の人数推定と帰属する副葬品についてのある程度の記述は行うことができた。

さらに、法皇塚古墳、および菅田第30号墳においては、未成人の個体が石室に埋葬されていたことを示す未萌出の永久歯および乳歯が確認されている⁽³⁾。これらの資料はいずれも出土地点についての情報を得ることはできておらず、歯牙以外の資料が出土していないため、頭位や埋葬姿勢、共伴遺物の有無について知ることはできなかった。しかし未成人個体が古墳の埋葬施設の中に成人とともに埋葬されていたという痕跡が得られたことは重要である。後期の群集墳などについては、ある時期から家族墓的な様相が濃くなるとの指摘もあり（若狭 2015）、今後、被葬者間の親族関係等の考察を推進していく際に、重要な資料となるだろう。

これまで古墳の出土人骨については、遺存状態が不良なことが多いため、人類学的には注目されることが少なかったが、今回、たとえ遺存状態のよくない資料であっても、出土地点を記録し、地道な同定作業を行うことで、被葬者と副葬品に関するコラボレーション的な研究ができることが明らかになった。すなわち、古墳や横穴の発掘調査にあたっては、一見、人骨の遺存状態が不良であっても、1点ごとの取上げが実施されれば研究の可能性は広がる。

また遺存状態が不良な個体であっても、歯牙はほとんどの場合、遺存しており、そこには病的所見（今回の場合は虫歯）が残されていることがある。これらの病気の所見はその人物が罹患した疾患のすべてを語るわけではないが、歯科疾患はその対象となる人物の食性を反映することがあるので、被葬者像を考察する上でも重要である。

本稿において分析対象としたのは、大きさが約5cm以上の人骨資料である。これ以下の大きさ、または部位同定が不可能な資料については、今回は観察対象とはしなかった。

また、破片状態の資料が人骨かその他の種による骨なのかについては、顕微鏡観察により実施が可能である（澤田 2012）。そのため、ヨモツヘグイなどに用いられた供献資料についても破片資料の骨片であっても種の同定がある程度可能であり、さらにより微少な破片資料であっても、理化学的分析によって年代や食性に関する情報を提示できる場合もある（米田 2015）。そのため、観察対象とする資料が破片状態であっても、私たちは手抜きなく、資料を取り扱わなければならないのである。また現段階では被葬者の人数等についての考察は、試論の域を出ない部分が多くなっている。そのため、今後調査事例を増やしつつ考察を深めていきたいと考えている。

注

- (1) 忽那敬三氏の協力により、法皇塚古墳発掘調査時の記録を拝読させていただき、情報を得ることができた。
- (2) 歯牙の咬耗の程度は、必ずしも正確な年齢を提示するとは言えないが、一般に最も遺存しやすい歯牙の咬耗から年齢推定されている。Broca I は成年から壮年、Broca II は壮年後半から熟年に相当するものとなる。
- (3) 千葉県富津市に位置する三条塚古墳（前方後円墳、全長 122 m、推定長 8.5 m 無袖式横穴石室が後円部

に造営)からも未成人個体(上顎左第2大臼歯(乳歯)、上顎右第2大臼歯(乳歯)歯牙片)は出土している。この他、成人個体のものとされる鎖骨・頸椎椎体部・手の基節骨・胸骨柄・橈骨近位端部の他、左第一切歯を含む歯牙片が出土しており、石室内における人骨資料の出土地点の詳細及び副葬品とのセット関係については不明であるが、以上の所見から、本遺跡には少なくとも成人1体と未成人1体が埋葬されていたと推定される。しかし、三条塚古墳に関しては、発掘調査担当者の記録によれば被葬者である人骨が発掘現場からすべて採集できていない。またかつての人骨鑑定では人骨資料数はもう少し存在していた(馬場悠男・梶ヶ山真理(1991)「三条塚古墳出土人骨」『君津郡市文化財センター年報 第9集』)が、現段階で遺存している人骨資料からの被葬者数は上記に記した通りとなる。

参考文献

- 稲葉昭智(2012)「墳形と石室」『金鈴塚古墳展—甦る東国古墳文化の至宝—』pp. 6-7
- 内山敏行(2015)「武器・武具から探る—古墳時代の人びと—」『『公開シンポジウム 古墳に埋葬された被葬者像を探る—ヒトとモノからの考察』』pp. 19-27
- 小片丘彦(1981)「日本古人骨の疾患と損傷」『人類学講座』5. 雄山閣, pp. 189-228
- 小沢洋(1990)『千葉県富津市三条塚古墳』(財)君津郡市文化財センター 3
- 金原正子・金原正明(1999)「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群第69号墓から検出された糞石の寄生虫分析および花粉分析」『人類学研究』第11号, pp. 191-194
- 小林三郎・熊野正也(1976)『法皇塚古墳』私立市川市博物館研究調査報告第3冊
- 澤田純明(2012)「焼骨からわかること」『骨考古学と蝦夷・隼人』pp. 89-94 同成社
- 下垣仁志(2011)『古墳時代の王権構造』吉川弘文館
- 鈴木一有(2010)「古墳時代後期の衝角付甕」『待兼山考古学論集』Ⅱ大阪大学考古学研究室
- 鈴木隆雄(1998)『骨から見た日本人-古病理学が語る歴史-』講談社選書メチエ(142)
- 清家章(2010)『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会
- 竹中正巳(2015)「人骨から探る—南九州の人びと—」『公開シンポジウム 古墳に埋葬された被葬者像を探る—ヒトとモノからの考察』』pp. 34-42
- 田中良之(2014)「人骨から見えてくる原始古代」『愛媛大学考古学研究室第14回公開シンポジウム・今治市村上水軍博物館開館10周年記念講演会 弥生・古墳時代の伊予諸島:環境と人間』, pp. 1-5
- とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター編(2012)『菅田古墳群 No.38』
- 松下孝幸(1991)『南九州における古墳時代人骨の人類学的研究』長崎大学医学部博士論文
- 橋本達也(2012)「九州南部における島内地下式横穴墓の位置づけ」『公開シンポジウム島内地下式横穴墓群出土品の評価と被葬者像』pp. 27-32
- 宮代栄一(2014)「金鈴塚古墳出土馬具の研究」『金鈴塚古墳研究』第2号, pp. 1-24 木更津市郷土博物館金のすず
- 若狭徹(2015)『東国から読み解く古墳時代』吉川弘文館
- 早稲田大学考古学研究室(1952)『上総金鈴塚古墳』早稲田大学考古学研究室報告第1冊
- 米田稯(2015)「食性分析から探る古墳時代の人々」『公開シンポジウム 古墳に埋葬された被葬者像を探る—ヒトとモノからの考察』』pp. 28-33

謝 辞

本稿を執筆するにあたっては下記の方々のお世話になった。阿部芳郎(明治大学)・稲葉昭智(木更津市教育委員会)・稲葉理恵(袖ヶ浦市郷土博物館)・桐村修司(富津市教育委員会)・忽那敬三(明治大学博物館)・進藤敏雄(栃木県教育委員会)・佃佐奈(富津市教育委員会)・中村享史(栃木県教育委員会)・松本太郎(市川市教育委員会) 敬称略・五十音順

中でも栃木県未来づくり財団が実施した菅田古墳の発掘調査では現場責任者・調査担当者・発掘調査補助

員の方々に人骨資料の丁寧な取上げを実施していただき、古墳時代研究の被葬者に関する考察を推進させる手がかりとなり、いかに現場の情報が大切かを再確認するものとなった。

さらに本稿の基本構想となった2015年11月明治大学グローバルフロントにて開催のシンポジウム「古墳に埋葬された被葬者像を探る—ヒトとモノからの考察」ではパネラー（内山敏行・佐藤敏幸・朴天秀・竹中正巳・米田稜）及び、コメンテーター（石川日出志・宮代栄一）の先生方には大変お世話になった。

また本稿は、明治大学日本先史文化研究所の研究推進員としての活動の一環であり、科学研究費補助金基盤研究C（研究課題番号：26370904「骨病変から考察する先史時代の社会・生活様相について」、研究代表者：谷畑美帆）に関するものでもある。

Interdisciplinary Research into the Dead in Mounded Tombs of the Kofun Period Utilizing Fragmentary Skeletal Remains

TANIHATA Miho

In order to approach who was buried in a mounded tombs of the Kofun Period of protohistoric Japan, Japanese archaeologists have principally looked into archaeological features related to burials and artifacts deposited with the dead. This is in a sense inevitable because the skeletal preservation is bad in Japan and because additional interment in a single burial chamber often resulted in disturbing the original condition of the initial interment. Nevertheless, it is to some extent possible to gain information about who was buried based on fragmentary skeletal evidence.

The subjects of this paper are burial chambers in which more than one body was buried, the localities of discoveries of skeletal fragments are recorded, and owing to these locality records the number of bodies and the orientation of the bodies can be determined. The data are 337 skeletal remains discovered in the burial chamber of the Ho'o-zuka Tomb in Ichikawa City, Chiba Prefecture, in the burial chamber of the Kinrei-zuka Tomb in Kisarazu City, Chiba Prefecture, and in burial chambers of the Sugeta Mounded Tomb Cluster in Tochigi Prefecture. In the Ho'o-zuka Tomb and Kinrei-zuka Tomb, the number of sets of horse trappings and the number of bodies buried agree, which leads the author to a consideration that each person buried possessed one set of horse trappings.

In the Kinrei-zuka case, suppose the order of three interments was from the one by the back wall of the burial chamber to the one in the stone coffin, and finally to the one outside the coffin, the first and second ones interred were between the ages of twenty- and thirty-years old, last one interred between forty- and sixty-years old. This suggests that the one who possessed the most elaborately decorated horse trappings and for whom a 95 meter long keyhole-shaped mounded tomb located at the strategic location at the mouth of the Tokyo Bay was dedicated was a young person. This also gives support for a hypothesis that the third one had to be buried in a mounded tombs dedicated to earlier individual because a restriction on the construction of keyhole-shaped mounded tombs was imposed after the initial interment.

In the Sugeta case, there are few artifacts that can be used for interpreting the dates, and the author has not determined the order of interments in the Tomb Cluster. Yet, the author has succeeded to some extent in determining the number of the dead in each burial chamber and to whom each funerary offering was dedicated. It has also become clear where in a burial chamber a minor was buried.

Such researches discussed above are possible only when fragmentary skeletal remains are picked up while the location of the discovery of each fragment is carefully and precisely recorded during an excavation. Previously, anthropologists have paid little attention to skeletal remains discovered in mounded tombs and burial chambers because the preservation is bad. Nevertheless, if the location of the discovery of each fragment is recorded and careful identification is made, it becomes possible to conduct collaborative research into the dead and

artifacts offered to the dead together. In the near future, research into the diet of one buried in mounded tombs and burial chambers would become possible, as well.

Keywords: Kofun Period of protohistoric Japan, human skeletal remains, human burial.

本文中に誤りがございましたので、謹んでお詫びさせていただくとともに 下記のように訂正させていただきます。ご理解の程、お願い致します。

■47 ページ「はじめに」項 上から 5 行目

【誤】「研究者によって験「セット」ないし「アセンブリッジ（組み合わせ）」、…」

【正】「研究者によって馬具「セット」ないし「アセンブリッジ（組み合わせ）」、…」

■48 ページ

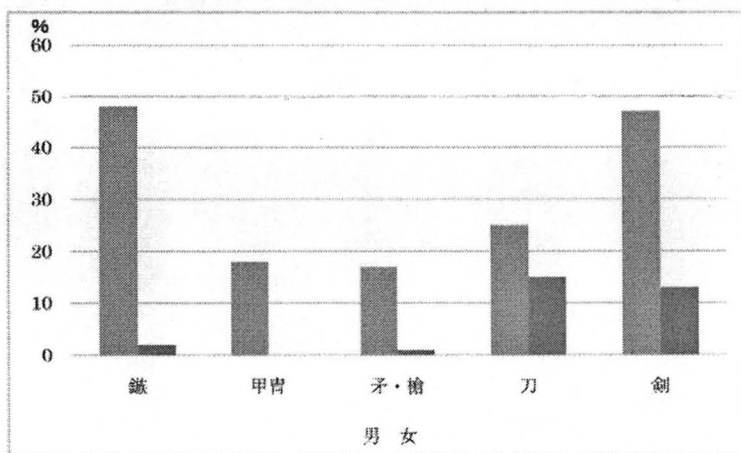
上から 6～7 行目

【誤】「編年とそれらに基づくいかなる「機能論」などが全盛の観がある、…」

【正】「編年とそれらに基づくいわゆる「機能論」などが全盛の観がある、…」

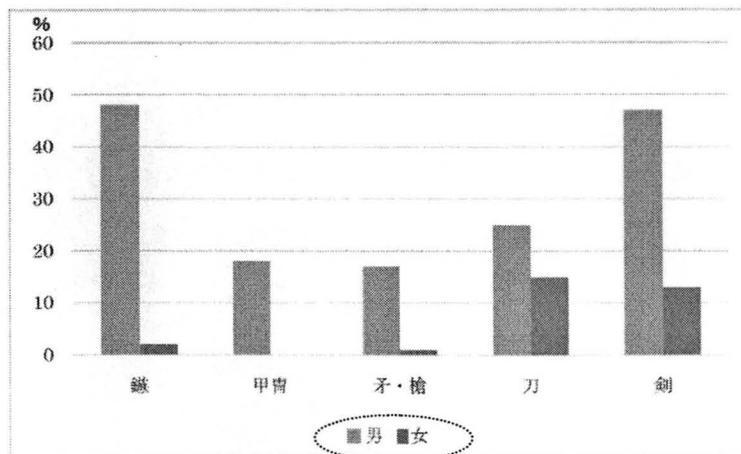
■72 ページ「第 2 図 武器の種類と性別（清家 2010 より作図）」

【誤】



第 2 図 武器の種類と性別（清家 2010 より作図）

【正】



第 2 図 武器の種類と性別（清家 2010 より作図）